

【講演会報告】

ワークショップ「医療人類学の近未来を語る」

(2007年度第4回講演会 日本文化人類学会北海道地区懇談会・北海道民族学会 共催)

松岡悦子

開催日：2008年3月29日

開催場所：北海道大学 人文・社会科学総合教育研究棟 W517 教室

講師：道信 良子（札幌医科大学）

花淵 馨也（北海道医療大学）

池田 光穂（大阪大学コミュニケーションデザインセンター）

この研究会では、医療人類学を研究しておられる道信良子さん（札幌医科大学）と花淵馨也さん（北海道医療大学）、池田光穂さん（大阪大学）をお招きし、それぞれの医療人類学を紹介いただいた上で、ディスカッションを行った。まず各演者の発表内容を紹介する。

1. 道信 良子 「グローバル・ヘルスの人類学の実践—グローバル企業における HIV/AIDS 対策を事例として」

グローバルヘルスとは、世界の健康をめぐる諸問題の南北格差をなくして、平等な保健医療を実現しようとする取り組みである。そこでは公平な保健医療を行うという目標が設定され、さまざまな健康課題に対して、社会正義を実現するという観点からの取り組みが行われることになる。道信氏は、タイ北部の日系企業の HIV 対策のエスノグラフィーをレビューし、そこに見られる「現実の姿」と ILO などが提唱する「あるべき姿」とのギャップに焦点を当てた。その結果、日系企業は他の国の企業に比べて、HIV/エイズ対策への認識が低いことがわかった。そこで、日系企業はどのような対策をとるべきかという課題に対して、道信氏は、HIV/エイズ対策を安全衛生制度に組み込む、エイズに対する認識を高める、企業の社会的活動の一環として対策を行うことを提唱した。このように、道信氏は医療人類学を実践の人類学として位置づけることを提唱した。



2. 花淵 馨也 「病の偶発性とプラグマティズム—医療人類学に未来は語れるか？」

花淵氏は、医療人類学に対して投げかけられる熱い視線（役に立つなどの）にはためらいを感じると述べる。そして、病の経験がいかに偶発性や不確実性に基づいているかを、コモロ諸島で出会った友人の奥さんの帝王切開の事例をもとに話した。コモロの人々の病や治療の経験が、その場や時々の偶然に支配されるものであるのと同様に、実は近代医療も不確実、相対性、歴史性、偶然性に依存している面があると述べた。そして医療人類学の貢献として以下のようなことをあげた。1 つは医学の普遍化に抗すること、2 つめは医療の脱医療化を行い、倫理的価値の普遍性を問



い直す契機とすることである。

3. 池田 光穂 「医療人類学の近未来を語る」

池田氏は、道信氏と花渕氏へのコメントを述べたあと、医療人類学の貢献とは、西洋近代医療が多様な実践のうちの一つであることを指摘した点だと述べた。そして、医療人類学の今後の方向性を考える上での参考として、アメリカ在住の2人の医療人類学者の発言を紹介した。その1人は、医療人類学はバイオメディシンを批判的に眺め、社会におけるバイオメディシンの



のあり方を変えていくことを目標にすることができると述べた。もう1人はそれとは対照的に、医療人類学は公衆衛生のプログラムに参加し、社会医学と協力して慢性病、禁煙、麻薬摂取、依存症などのテーマに取り組むべきだという意見を述べた。

医療人類学がバイオメディシンに対してとるスタンスは多様だということができるが、池田氏は、近年はバイオメディシン自体も社会に対してとる位置や、そのあり方が変化してきているのではないかと述べた。たとえば、補完代替医療（CAM）の人気や、質的研究の増加、また健康転換などの現象は、医療自体が変わりつつあることを示しているとした。

その後、質問やコメントが多く述べられたが、いくつかを紹介しよう。

道信氏に対して、「社会正義ということを言われたが、そのような共通の誰にも transparent なものがあるのか。また、企業の社会的責任としてエイズ対策をすることを提唱しておられたが、それは企業の労働力搾取につながるのではないか」という問いがなされた。それに対して道信氏は、「たとえ、企業の労働搾取につながる面があるとしても、少しでも労働者に知識を与え、死亡率の低下につながるのなら、それは何もしないよりはましなのではないか」と答えた。

花渕氏の発表に対して「コモロの人々が伝統的な医療を利用するのは、近代医療が機能していないからではないか」という意見が出された。それに対しては、「そうとは限らない、近代医療があっても伝統的治療は用いられるし、近代医療が手に入るようになれば、伝統医療が無くなるというようなものではない」という意見がフロアーから出された。

また、医療人類学という学問分野の再生産のためには、学問領域の設定や方法論を確定し、他の学問分野（たとえば医療社会学）と区別する必要があるとの指摘がなされた。

現状では、医療人類学の方法論やそこに含まれる内容、また医療に対するスタンスは複数あるといえる。さらに「親学問」である文化人類学との関係をどのように考えるか、また役に立つこと（実践）を目指すべきか、あるいは医療人類学をどのようにマーケティングするかなどさまざまな課題が議論された。

（まつおか・えつこ／旭川医科大学）